

昭和 40 年の業界動向・・組合機関誌からみる関西セルロイド業界
(セルロイド産業史 31)

平井東幸

1. 昭和 40 年 - 東京オリンピック景気の反動も、

今回も『関西セルロイド・プラスチック情報』（関西セルロイド・プラスチック工業協同組合の月刊誌）＊をベースに昭和 40（1965）年の業界動向を概観しよう。

この年は、東京オリンピック（94 か国が参加）景気の反動もあり、また、消費者物価が 7.4%も上昇、金融引き締めもあって国内景気は低迷し、繊維業界では中小企業の倒産が多発した。

国際的には、日韓基本条約の調印や国連安保理事会の非常任理事国に初選出、敗戦後 20 年で本格的に先進国の仲間入りを果たした年であった。海外では、中国の文化大革命が始まり、米国によるベトナム北部への爆撃開始などがあった。

国内では、国鉄が「みどりの窓口」を開設、石川島播磨が世界一のタンカー「東京丸」（15 万ト）を進水、世界一の造船王国としての気を吐いた。

世相面では、倍賞千恵子の「さよならはダンスの後に」が大流行、日本サッカーリーグが発足。流行語としては「しごき」、「まじめ人間」が、ファッションでは、パンタロン、パンストが登場した。

＊昭和 39 年から誌名にプラスチックが加わり『関西セルロイド・プラスチック情報』と改称された。機関誌名にセルロイドにプラスチックが加えられたことは時代の流れを反映している。

2. セルロイド業界、業容はおおむね横ばい

昭和 40 年の生地の生産推移をみると（表 1）、タキロンの撤退があったものの新製は減産に一応の歯止めがかかり、前年比ほぼ横ばいで 4 千ト台を維持した。設備稼働率は 40%をキープした。

表 1 セルロイド生地生産の推移(単位：トン)

| 昭和 | 新製生地 | 再製生地 | 合計 |
|----|-------|------|-------|
| 34 | 4,675 | 750 | 5,425 |
| 35 | 4,698 | 759 | 5,457 |
| 36 | 5,256 | 758 | 6,014 |
| 37 | 4,777 | 647 | 5,424 |
| 38 | 4,123 | 673 | 4,796 |
| 39 | 3,864 | 643 | 4,507 |
| 40 | 3,885 | 622 | 4,571 |

(出所) 『セルロイド情報』 1966 年 3 月号ほか

次に、出荷内訳を、昭和 36 年から 40 年 1~4 月についてみると (表 2)、輸出が好調であったが、国内向けは減少傾向となっている。この間の国内加工業界での石油系プラスチックへの素材転換が著しく進展したことが伺われよう。

表 2 生地生産と出荷の推移 (単位: トン)

| 摘要 | 昭和 36 年 | 昭和 37 年 | 昭和 38 年 | 昭和 39 年 | 昭和 40 年 (1~4 月) |
|------|---------|---------|---------|---------|--------------------|
| 生産 | 6,014 | 5,424 | 4,796 | 4,507 | 1,549 |
| 新製 | 5,256 | 4,777 | 4,123 | 3,864 | 1,344 |
| 再製 | 758 | 647 | 673 | 643 | 206 |
| 出荷 | 5,963 | 5,476 | 4,784 | 4,513 | 1,560 |
| 新製国内 | 4,539 | 4,017 | 3,520 | 3,198 | 1,112 |
| 新製輸出 | 694 | 806 | 584 | 670 | 235 |
| 再製 | 730 | 652 | 679 | 646 | 214 |

(出所) 同誌最終号 1966 年 8 月号ほか

3 昭和 40 年のトピックス

業界をめぐるトピックを同誌からいくつか紹介してみよう。

1) 用途別の再製生地投入の変遷

セルロイドの国内需要が次第に減少する中で、用途別の推移はどうなっていたのか? 今回は再製生地についてみる。詳しくは表 3 の通りである (なお、新製生地については、本連載の前号 (30 回) で紹介済み)。

再製生地は、玩具が三分の一強を占め、次いで櫛頭飾り、筆入れ・文具雑貨を含めると全体のほぼ 3 分の 2 を占め、新製生地とは用途がかなり異なっている。主要用途別の投入量を昭和 36 年から 39 年の 3 年間についてみると、最大の用途の玩具は減少、眼鏡フレームは横ばい、櫛頭飾りとその他用途は増加と、化粧容器が減少と用途によって明暗が分かれた。

「大体新製生地生産の 2 割が再製されている訳である…用途を見ても、二級品ランクにしか使用されない・・・つまり、高級品化した新製分野と、懸隔した大衆分野向きに、再製が堅牢性と安値を買われて・・・」と (同情報 40 年 5 月号 {生地のうごき} 欄)。そもそも、再製生地は品質的には新製に比べて当然ながら劣るし、価格的にも 2~3 割方安価であった。

表3 再製生地の用途別投入量（単位：トン）

| 摘要 | 37年 | 38年 | 39年 |
|--------|-----|-----|-----|
| 玩具 | 261 | 243 | 223 |
| 化粧容器 | 54 | 23 | 0 |
| 筆入れ | 56 | 84 | 40 |
| 文房雑貨 | 41 | 33 | 11 |
| カラー | 8 | 6 | 2 |
| 腕輪 | 87 | 45 | 67 |
| 櫛頭飾り品 | 47 | 103 | 103 |
| 鏡枠 | 9 | 8 | 6 |
| 眼鏡枠 | 60 | 44 | 62 |
| スポーツ用品 | 11 | 0 | 31 |
| その他 | 76 | 118 | 120 |
| 輸出 | 0 | 3 | 5 |
| 合計 | 646 | 678 | 645 |

（出所）1965年5月号

（注）表掲記以外に会員以外の棒管業者の生産量が150～200ト、ある。

2) 振興事業の推進

セル製品の需要がプラスチックとの競合が価格的にも性能的にも一層激化している中で、業界としてその振興が急務になっている。セルロイド硝化綿工業会の山脇義勇会長も、組合誌40年1月号の「新年の御挨拶」で、「セルロイド製品の振興事業にできるだけの協力をつづける所存」と述べている。

年初には、東西の関係五団体が会合をして、優良品推奨制度の一層の推進（因みに、関西では推奨ラベルの意匠登録をして一定の成果を挙げている）、そのほか、輸出用の共同カタログ・名簿作成配布などのPR対策を東西が協力して実行していくことで意見の一致をみた。なお、参加団体は次の5団体。

- セルロイド硝化綿工業会
- 関東セルロイド生地商業協同組合
- 大阪セル・プラ商業協同組合
- 関東セル・プラ製品工業協同組合
- 関西セル・プラ工業協同組合

これを受けて、5月には既存の日本セルロイド協会を振興事業の実施母体として、振興計画をまとめ、順次実行していくことになった。その要点は次の通り。

- ① 基本的調査の実施・・・加工業界、流通構造及び市場の実態調査
- ② 需要促進・販路拡大に関する流通機構上の積極的活動
- ③ 業界に対する技術指導とPR

3) 組合機関誌の休刊

組合が昭和25年8月以来、毎月欠かさず発行してきた『セルロイド・プラスチック情報』が昭和40年8月の盛夏見舞号(180号)を最後に廃刊になった。業界の団結と親睦、PRと論壇提供に大きく資してきた。その理由は、「人手の関係上、経費の都合上、いろいろと続けていかれなくなった」(同誌最終号)としており、また、「人手不足と資金難が上げられているが、セルロイドからプラスチックへの時代の大きな底流が影響していることは否めない」(『組合創立75周年記念誌』)としている。

時代は、経済が開放体制に移行する局面に入り、セルロイド業界も会員の減少等もあり、業界団体の役割低下もその背景にあったとみられる。

4) 主要企業の動向・・・タキロンの撤収

同社は、昭和40年(1965年)にセルロイド生地生産事業から撤収した。大正8年(1919年)に滝川セルロイドとして創業の同社は、ダイセル、旭化成に次ぐ大手の座を占めてきたが、いち早くプラスチック事業に転進して、新しい需要に積極的に対応して今日、プラスチック総合製品メーカーとなっている。産業構造の大きな変動の中で巧みに事業転換を果たした典型である。

因みに、生地製造から撤収したのは、旭化成昭和34年(1959年)、大成化工昭和42年(1963年)があり、タキロン撤収の翌年の昭和41年(1966年)には、筒中プラスチックが生産を停止し、業界の規模縮小が続いていく。

4 おわりに

昭和40年の業況は、頼みの輸出の好調もあって規模縮小が止まったものの、内需はプラスチックとのさらなる競合激化、加工業者のプラスチックへの事業転換、さらに危険物取締法の強化等、業界を巡る環境条件は厳しさを増していた。タキロンの生産終息にみられたようにセルロイド業界の規模はさらに縮小していく事態となっていた。

この稿についても、セルロイド産業文化研究会の大井瑛大阪代表のご点検を頂きました。ここに記して謝意といたします(2022年6月22日)